

もうすぐ20歳、『ジーニアス』の新たな進化

——改訂の大きな方針



南出康世

OED と『ジーニアス英和辞典』

『オックスフォード英語辞典』の現行の書籍版は第2版(1989)である。*NED* (1928) 改名の*OED* 初版(1933)が12巻+補遺1巻で、第2版が全20巻であるから、大改訂のように考えている人は多いが、巻数が増えたのは、1933年の補遺を取り入れた新補遺4巻(1972-1986)が加わったため、本文の内容そのものは初版とあまり変わっていないのである。現在も*OED* の名声が衰えないのは、新補遺によって新語を大幅に追加して、時代の要請に答えていることはもちろんであるが、母胎となった初版の記述がしっかりしていたためである。現在第3版に向けての改訂がオンラインで行われている。これは文字通り全面改訂である。

さて、*OED* と同じようなことが『ジーニアス英和辞典』にも言えるのではなかろうか。『ジーニアス』の初版は1988年である。その後、第2版(1994)、第3版(2001)と改訂を重ねてきた。しかし、*OED* と同様、本体の中味自体は初版以来それほど大きく変わっていないのである。『ジーニアス』が常に英和辞典のトップランナーであり続けてきたのは、改訂の都度、新機軸を盛り込み常に時代の要請に答えてきたことはもちろんであるが、小西友七編集主幹が心血を注がれた初版の記述がしっかりしているためである。しかし最近20年の時代の変化、英語の変化はすさまじい。いかに強固たる母胎であってもほころびが出てくる。そこで『ジーニアス』の、G4に向けての全面改訂である。

コーパスの構築と基礎作業

改訂に向けて大きな準備をした。『ジーニアス英和大辞典』と『ジーニアス 第3版』(G3) の時代からすでに独自のコーパス(4千万語)を構築していたが、今回の「ジーニアス・コーパス」(1億語)はこれとは別のアメリカ英語のコーパスである。すでに、イギリス英語中心のBNC(1億語)、Collins WordbanksOnline(5千万語)が利用可能である(有料)。版權の問題があってもいずれのコーパスからも直接引用はできないが、英米語の比較・頻度・変異形・コロケーションを調べるのに強力なツールとなった。また桁違いのスケールをもつ検索エンジンGoogleもAdvanced Google Searchを使えば、フレーズ/文単位の検索も可能でたまかな傾向を知る上でコーパスとして利用できる。サイトの絞り込み検索によってかなり精度の高い検索も可能になった。こういったコーパスとさまざまな語彙頻度調査を参考に、G3の下記の項目を徹底的に見直し、21世紀の英語をより正確に反映するよう全面改訂した。

1. 収録見出し語(主見出し語・下位見出し語)
2. 収録語義
3. 語義配列
4. 頻度表示
5. スピーチラベル

語義配列について簡単にふれる。G3までは語義配列は「語義の流れ」重視の配列であった。これだと全体の語義を見渡すのに便利だが、あまり頻度の高くない語義が上位に來たりしていた。し

かし、一般的にあって、ユーザーは上位の語義を頻度の高い重要な語義と捉える傾向がある。この点を考慮して、今回の改訂では語義配列の基準を頻度とした。こうしてみると、当然のことながら、『正式』とか『物』といったラベルの付いた語義は特定のテキストタイプに偏在するため、テキストタイプにかかわらず遍在する一般語義の下位に来ることが語義配列で明示された。

コーパスの限界：専門語義・専門用語の扱い

しかしコーパスに準拠すると多くの専門語義・専門用語は居場所を失う。どうすべきか。

最近の電子辞書には国語辞典、英和・和英辞典に加えてマイペディアのような百科事典が搭載され、これら複数の辞典・事典を一括検索ができるようになり、検索の目的も多様化してきた。そして理科系、文科系を問わずさまざまな分野の学生が専門用語、術語の検索に電子辞書を利用するようになった。これに一役買っているのが英和辞典である。英和辞典は紙の辞書から出発するから、スペースの制約で、専門分野名と訳語しか載せられないことが多いが、それだけでも、まず専門分野の用語であることが確認でき、訳語からある程度、用語の中味を推測できる。載せている意義は大きいのである。EFL / ESL 辞典は概して専門用語をほとんど載せていないのだが、『ジーニアス』はこれまで専門語義、専門用語の収録を重視してきた。G4 では、別途、専門家に検討を依頼し、結果として従来通り専門語義、専門用語収録重視の方針を堅持することになった。この点で G4 は EFL / ESL 辞典と一線を画しているのである。

語法情報の充実と文法コラムの新設

語法・文法・コロケーション情報のさらなる充実ぶりをいくつか紹介しておこう。

コロケーション 動詞+around のコロケーション

ヨン：特定の動詞と結びつくマイナスのイメージをとまう「付き合い」を意味する：Her husband is **hanging around with** a guy who is openly gay. (彼女の夫は一目でゲイとわかる男と付き合っている)/ Don't be **fooling around with** girls. (女の子と遊び歩くのはやめなさい)/ I'm going to stop **running around with** those guys. (あの連中と付き合うのはやめようと思っている)。go around には特に悪いイメージはない。She used to **go around with** Sam all the time. (彼女はサムと始終出歩いていた)。cf. I've known him since I was a child. (彼とは子供の時から付き合いです)。

類語比較 **besides, except, apart from, other than** : besides は追加「～に加えて」、except は除外「～を除いては」の意で用いる。apart from, other than は追加と除外の両方に使える：There are two children in my family **besides** [apart from, other than, *except] me. (私の家族には私以外に子供が二人いる)《英語では「私に加えて」と発想する》/ I have been to every country in Asia **except** [*besides, *apart from, *other than] China. (私は中国を除いてアジアの全ての国に行ったことがある)。否定文ではどれも使える：He has no friends **except** [besides, apart from, other than] Tom and Bill. (トムとビル以外彼は友達が無い)。

さらに、G4 では新たに、生成文法、認知言語学などの知見を取り入れた文法コラム（二重目的語構文、結果構文、繰り上げ構文、V+one's way 構文、能動受動態など）を設け、事物 (entity)・モノ (thing)・関係 (relation) を視覚化した図を用いるなど、言語学と辞書学の融合を図る試みをしたことを付け加えておきたい。

(みなみで こうせい・大阪女子大学名誉教授)